

毎月主催している文化サロンで、「天われて欲しくない日本語」は何かというテーマで話が弾んだ。

いま世界を覆うグローバル化とIT化の波は、ひとびとのライフスタイルに大きな影響を与えている。言語も例外ではない。水村美苗著『日本語が亡びるとき』によれば、グローバル化とIT化の進展の時期に、たまたま軍事力や経済力によって世界に展開した国の母語たる英語が世界の普遍語になりつつある。いまや英語ができなければ世界の動向は分からないし、学問であれ文学であれ、英語で表現しなければ自分の言いたいことを

新美術 時評

近藤誠一

概念が何であるかを教えてくれることになる。

サロンに参加した20数人の答えは、もろもろさまさまだった。「ありがとう」、「お先に」、「ちいさく」、「さし塩梅」、「そこはかとない」、「ゆかしい」、「たしなみ」、「じかたない」、「をかし」、「もったいなさ」、「名残り」、そして「時雨」など(同じ自然現象を表す多くの語彙、「さらさら」などのオノマトペ(擬声語)など……)。

これらに共通しているものこそ、日本人が日本人を何者と考えているかを、無意識に表しているものなのではないか。

そこにみえてくるのは万物へ

つけられない。斜体や太字にその機能はない。

みな英語を使い、あるいは英語に翻訳されることを意識して英語的論理(ものをしゃべり、書くようになる)で、誰もが

日本語の奥にある日本人の美意識

世界に伝え、評価してもらえないくなる。その結果英語が普遍語になり、人類は英語的発想が支配するモノカルチャーになってしまう。これが著者のもっともな懸念だ。

他方牧野成一著『日本語を翻訳するということ』によれば、英語などに翻訳できない日本語は思っている以上に多い。漢字、ひらがな、カタカナの使い分けは英語にならなく。「美しい」より「うつくしい」の方が、読む相手に優しい印象を与え、共感を得やすい。「ウツクシイ」は話し手が日本語が堪能でない外国人であることを示す。しかし英語のbeautifulとの区別は

こうした日本語ならではのニュアンスに無頓着になる。そうになると、英語にならない、微妙なニュアンスをもった言葉そのものが使われなくなってしまう。それは既に、便利だが味気のないスマホ用語の氾濫によって始まっている。こうしてある日本語が知らず知らずのうちに消えていくという事は、即ちその言葉の裏にある概念が、もはや社会において価値をもたなくなることの意味する。

従ってある日本語が消えることとなに残って欲しいと願うという事は、即ちその人に自分が日本人であることを意識させ、誇りの心の安らぎを感じさせる

の「やさしさ」と、黒か白かのような明確な境をつくらないことで、共感しあえる範囲を広くとる「あいまいさ」だ。そして自然の移ろいの中ですぐ消え去るはかなさ、そこに宿る小さな命に、淡い、愛おしさを感じる美意識だ。そこから自分をへりくだり、相手を慮り、いたわる心が生まれる。そういう言葉やこぶさを「うつくしい」と感じる。こうした日本人の性格や美意識を生んだのは何か。答えは容易には分らない。しかしそれが四季のある温暖な気候風土と民族の歴史を抜きに語れないことは確かであろう。

(近藤文化・外交研究所代表)